

## 第 102 回日本精神神経学会総会

## シンポジウム

## OCD 関連障害をめぐって～とくにセロトニンの脳内作用との関連

コーディネーター 三國 雅彦

各演者の発表後の総合討論で、選択的取り込み阻害剤 (SSRI) が奏功した obsessive-compulsive disorder (OCD) 関連障害の症例についての経験を一般聴衆が互いに報告しあい、その SSRI の効果は「まあいいか」とこだわりを抑制できるようになる、いわば安全保障感を生みだすことに起因するのではないかという討議がなされた。この「まあいいか」という安全保障感を評価項目に入れた SSRI の効果判定に関する報告はなく、わが国の臨床医が抽出した SSRI の効果であると考えられる。このような症例を多数集めて解析する共同研究をして世界に発信しようという提案まで出される光景を目の当たりにして、このシンポジウムをオーガナイズしてよかったと安堵し、各演者の先生方の熱心なご発表に感謝した次第である。

強迫性の臨床特徴をもつ疾患として、身体表現性障害、醜形恐怖症、心気症、摂食障害、自閉症などの他、大うつ病性障害、統合失調症などの一部でも認められているが、強迫性の臨床特徴をもついろいろの精神疾患の方々に接していると、強迫性障害の併存として捉えることが適当なのか、その精神疾患の病態に直接かかわっているのではないかと判断に迷い、その治療として SSRI をつかうべきか、否かでまた迷うことになる。最近、Hollander らはこれらを併存と考えるよりも、想定される神経回路の障害の共通性、薬物治療反応

性などから OCD スペクトラム障害として位置づける考え方を提唱し、DSM-V に反映させようとしている。

このシンポジウムでは、まず、OCD の全体像と治療の概説を大阪市立大学の松永寿人先生、切池信夫先生にお願いし、強迫性障害の薬物療法・行動療法とその奏功機転を脳機能画像も含めて九州大学の中尾智博先生、黒木俊秀先生に解説していただき、OCD の概念と OCD スペクトラムならびに SSRI 治療反応性について薬理学的な立場から杏林大学の田島 治先生、臨床での実践の面から山口大学の渡辺義文先生に話題を提供いただき、神経回路の面から明治製菓株式会社の蜂須賀先生に解説いただき、互いに理解を深めることができた。

OCD の治療反応性の分子機構に関連してセロトニンが注目されているが、セロトニン以外の神経伝達物質の関与なども論じられるようになっており、今後、さらに研究を進展させ、シンポジウムなどを開催して理解をさらに深め、世界に発信していくことができるようになることを願っている。

文献 Bartz, J.A., Hollander, E.: Is obsessive-compulsive disorder an anxiety disorder? Prog in Neuro-Psychopharmacol & Biol Psychiat, 30; 338-352, 2006